

すべてが一つになる 表現を探して

映像作家・能管奏者 豊島由佳

とよしま ゆか

国際文化教育交流財団奨学生（一九九八年度）。東京藝術大学音楽学部邦楽科能楽囃子専攻卒業。東京藝術大学大学院音楽研究科邦楽能楽囃子専攻修了。二〇〇二年文化庁在外派遣芸術研修員（フランス）。パリ在住。
八歳より能管を一噌庸二師（一噌流十四世家元）、一六歳より仕舞・謡曲を泉泰孝師（観世流能楽師シテ方、重要無形文化財保持者）に師事。



▼日本古来の伝統から西洋文化へ

「せっかく邦楽をやっているんだから、フランスにでも行ってみなさい」。人生初の大転機への扉を開いてくださったのは、東京藝術大学修士課程に在籍していた当時の音楽学部長で、フランス語の教授でもあった斉藤一郎先生の、何げない一言であった。折しも、東京藝術大学とパリ国立高等音楽・舞踊学校（CNSMDP）が姉妹校提携を結び、藝大からの代表派遣留学生の選考時期であり、私は率先して立候補することとなった。

子どものころから、お稽古ごととして能に親しみ、藝大音楽学部邦楽科能楽囃子専攻へと進学した。藝大は私以外のほとんどが、一族代々能楽師。幼少時から空気のようになが

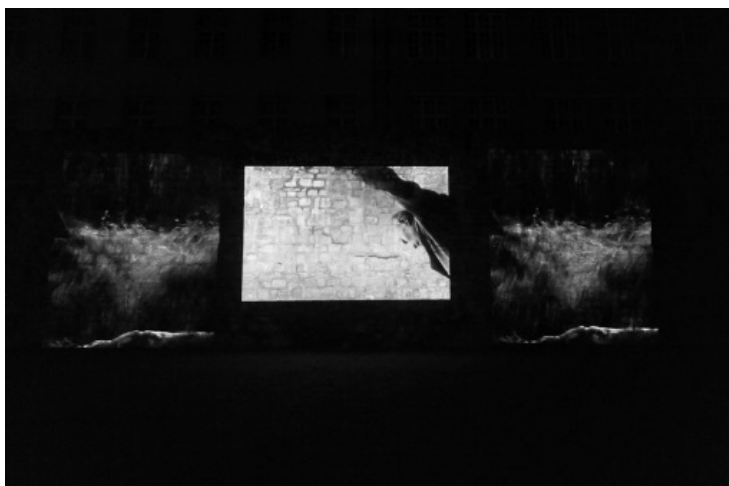
生活の一部であり、二歳で白足袋を履き、子方として能舞台に立っていたという正真正銘の英才教育を受けた学生が集う場で、日々をただ芸に捧げるといふ特殊な学生生活だった。彼らの芸は、技術や努力だけでは得られない芳香のようなものを放っていた。恐らくそれが、能の大成者である世阿弥がいう「芸の花」であると理解した。そしてその花は、何百年にもわたって受け継ぎ保たれる伝統という土壌にこそ開き得るのではないかという思いに至る、そんな日本文化の精髓を学んだ学生時代だった。

藝大では、西洋音楽の諸学科に対して邦楽科は特異なポジションにあり、フランスへの代表派遣留学生選考時には、「能の学生をフランスに送るのは、相撲をフランスで学ぼう

●経団連国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。海外の大学・大学院に留学する日本人学生や日本の大学に在籍する外国人留学生に対する奨学金の支給を通じて、わが国の学術研究や世界経済の発展に寄与するとともに、国際社会に貢献する人材を育成することを目的に活動している。

とするようなナンセンス」と痛烈に矢を向ける教授もいた。他の西洋音楽専攻の候補者と一票差で選出された時には、個人の喜び以上に、西洋文化が優位な立場である当時の学内の風潮のなかで、日本の伝統という価値を認められた喜びを強く感じた。そしてこの時、経団連国際文化教育交流財団の助成をいだけなければ、二年間の留学生生活を過ごすのは不可能だった。奨学生に選ばれた時には、日本の八百万の神が追い風を送ってくださったような安堵に包まれた。

語学力も未熟なままに慣れない海外生活を送る留学生にとって、組織に身分を保障されるということは、得難い恩恵である。到着早々に必要な滞在許可も、移民や不法滞在者の問題を抱えるフランスでは、学生相手にも審査がなかなか厳しい。申請窓口であるパリ警視庁では、必要書類に一点でも不備があれば、数ヶ月経っても正式な滞在許可を獲得できないケースも多い。国際文化教育交流財団が身元を保証しているという証明書、そのただ一枚が手元にあることで、実質的にも精神的に



Nuit Blanche Paris 2010 での「HELENA」インスタレーション
©Déborah Lesage/MAIRIE DE PARIS.jpg



HELENA [Labrys]

映像作品制作と同時に、舞台芸術などとのコラボレーション活動も多数。能管の演奏活動では、白井晃演出・三宅純作曲/新国立劇場「天守物語」、マルタ・アルゲリッチによる「KoKoro」(2011年)、ユネスコ・パリ本部「Melody for Peace」(2007年)等に参加。

<http://www.yukatoyoshima.fr/>

もどれほど心強かったか。

ヨーロッパの現代との出会い

パリ国立高等音楽・舞踊学校での学業は当初、能管(能で演奏される笛)を用いて現代音楽を演奏することがテーマであったが、世界各国の舞台作品が集うパリで、さまざまな人や舞台作品との出会いを重ねるうちに、次第に音楽だけではなく舞台芸術を広く学びたくなった。結局、ダンス部門に在籍するダンス表記法研究者と共に、能の振り付けを西洋の

ダンスの譜面に起こすことになった。そんな経緯もあり、ダンス表記法を生んだドイツの表現主義や、コンテンポラリーダンス自体へと、さらなる関心を持つようになった。型という厳格な様式を持つ伝統である能と、様式を否定して型を持たない自由な現代の表現であるコンテンポラリーダンスは、反対方向に向かって出発するようだが、最終的には円を閉じるように、一致する点がある。それは、劇的さを持つ抽象詩のような表現であるということだ。この留学生活で得たその気付

きが新たな出発点となり、藝大卒業後再び、文化庁在外派遣芸術研修員としてフランスに戻り、能の物語を言葉のない現代の映像作品とするシリーズ「HELENA」をつくり始めた。以降、映像制作を仕事として、今日まで一〇年以上をフランスに生きている。

これから

二〇一〇年、パリ市主催の現代アートの祭典「Nuit Blanche」で、パリ最大の十二世紀の城壁跡をスクリーンとして使用し、「HELENA」シリーズの映像インスタレーションを発表した。能という日本の中世文化を原典とする「HELENA」の映像と、パリの中世遺跡が融合する空間を創造した経験により、今後の方向性を見いだせたように思う。

能という大学での専門を離れ、また日本を離れ、私は留学生活の実りを具体的に祖国へ還元してはいない。けれども、綿毛が飛んで広い世界のあちこちへ渡るように、私の心の源であり続ける日本の伝統を種に、フランスという大地だからこそ生まれてくる、変種の花のような表現のかたちを見つけていくことができたら素晴らしいと思う。すべての始まりは、国際文化交流財団のおかげで得ることができた留学生活であった。あの時期に吸収したすべてが、今の人生の出発点となっていることだけは確かである。